

想起のジャーナリズムの役割と実践に関する考察 —東日本大震災の周年報道を事例に—

本 多 祥 大*

1. 研究の目的

周年報道に関連する既往研究を概観した上で東日本大震災の周年報道の内容を分析し、分析方法などの妥当性について考察する。

2. 周年報道と集合的記憶

想起のジャーナリズムの一種である周年報道は、現在のプレスによる歴史的な出来事の想起や節目の報道と定義される。周年報道においてメディアは、想起の公なフォーラムであり、ジャーナリストは、想起の最前線にいて集合的記憶を形成するプロフェッショナルであるとされる。また、メディアが語る新しいストーリーは、現在の中に過去を文脈化し、過去の中に現在と未来を文脈化するとされている。

集合的記憶については、能動的記憶と受動的記憶といった観点から次のように考察されている。能動的に広がり過去を現在として維持する記憶はカノン、受動的に蓄積され過去を過去として保持する記憶はアーカイブと定義される。そして、過去にアクセスする歴史学者やアーティストたちの任務とは、蓄積されたアーカイブの内容を調査し、新しい文脈の中にアーカイブをフレーミングすることであるとされる。この任務は、周年報道に携わるジャーナリストにも当てはまるとされている。

3. ジャーナリストが過去を想起する方法

ジャーナリストが過去を想起する方法は、(1)記念、(2)歴史的類推、(3)歴史的文脈に類型化される。記念とは、過去の出来事そのものを思い出すような方法であり、記念式や過去の出来事で実際に起こったこと等が伝えられる。歴史的類推とは、現在の問題を分析するツールとして過去の出来事を利用するような方法であり、過去の出来事が歴史の教訓として伝えられる。歴史的文脈とは、過去の出来事が起こってから今に至るまでの軌跡をたどる方法であり、私たちがどうやってここまで来たのかの説明される。

これらの実践はさらに、①過去の出来事の記念、②類推、③歴史的文脈、④過去の出来事にまつわる文化的な生産、⑤過去の出来事の個人化、⑥過去の出来事にまつわる事実中心の記憶、⑦過去の出来事との関連性の省察という7項目に細分化され、新聞の内容分析に応用されている。本研究では7項目を参考に、新聞による東日本大震災の周年報道の内容を分析し、周年報道を通じてどの

*ほんだ よしひろ 日本大学大学院新聞学研究科博士後期課程、東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター特任研究員

ようなカノンが形成され得るのか、また、どのようなアーカイブが蓄積されているのかを考察した。

4. 分析結果と今後の課題

研究会ではプレ調査として、2012年～2022年までの各年3月11日の朝日新聞の東日本大震災にまつわる記事（N=985）を分析した結果を報告した。先の7項目にしたがって記事内容のコーディングを試みたところ、⑤個人化（32.9%）、③歴史的文脈（26.3%）、①記念（20.2%）、⑦過去の出来事の省察（19.4%）、⑥事実中心の記憶（12.5%）、④文化的生産（10.9%）、②類推（10.1%）という結果になり、過去を過去として保持するようなアーカイブが多く、過去の教訓を現在に維持するカノンが少ないのではないかと考察した。

上記に対して会場からは、(1)量的な変化を見るのであれば、年ごとに分けて傾向が見られるかを分析する必要がある、(2)集合的記憶を研究するのであれば、報道が描く象徴的な現実のみならず、地域の人々が持つ主観的な現実や出来事そのものの客観的な現実を併せて分析する必要がある、(3)カノン等は量的な分析に適した概念なのかを考える必要がある、といった意見をいただいた。この中でも特に、カノンやアーカイブといった概念が量的な分析に適するかという点は、今後、周年報道を実証的に分析していく中で省察しなければいけない重要な課題である。研究会によって見つけた課題を踏まえながら、周年報道を実証的に分析する方法を模索していきたい。